

家人・奴婢に関する一考察

著者	丸山 忠綱
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	16
ページ	1-20
発行年	1964-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/11109

家人・奴婢に関する一考察

丸 山 忠 綱

はじめに

一、家人の戸籍の問題

二、家人と奴婢の同一性

付、古代人の賤民観

まとめ

はじめに

家人、奴婢（あるいはそれを含む古代賤民制度）に関する研究は既にいくつか出ている。阿部弘藏⁽¹⁾、宮崎道三郎⁽²⁾、三浦周行⁽³⁾、川上多助⁽⁴⁾、滝川政次部⁽⁵⁾諸氏による実証的研究は残された史料が少ないだけに行きつくところまで行っているかの感がしないでもなかった。そこにこのような研究成果をふまえながら奴婢そのものの長い歳月をかけての進化の結果として、奴婢といくらもかわらないとはいいいえ、家人という「家族」をなすものも現われたとする構想を基本線とするユニークな石母田正氏の研究⁽⁶⁾が出てわれわれの目を驚かせたのも既に二十余年以前のことであった。戦後は古代国家の奴隸とか総体的奴隸制とかいう言葉はよく使用されておりながら、五色の賤などに関する個別的な研究はほとんど見られなかった。坂本太郎博士の「家人の系譜」⁽⁷⁾も取り扱った角度は別であった。これは何より史料の少ないことによって今更新しいものが出て来ないであろうという考えが先に立ったためであろう。私は石母田氏の論文に多くのものを負っているが、なお若干の疑問と異論を懐いているので、ここに私の考え

を開陳して大方のご叱正をえたいと思う。

一

古代の戸籍に家人の名が少しも見えないのはいかなる理由に基づくかという疑問に対し、それは実は奴婢の名のもとに古代の戸籍に記載されていたのであったと鮮かな解答を与えられたのは石母田氏であった。家人がまた奈良時代には奴婢と呼ばれていたことを既に早く指摘されたのは滝川博士であった(8)。しかし博士は、これをさらにのばして戸籍の記載という点にまで論及するには至らなかったのである。さて、この石母田氏の明らかにせられた点については別に異論はないのであるが、論証の過程において、得心のいかない点がいくつかある。それを次に述べよう。

(I) 本居内遠の「賤者考」(9)以来、三浦周行博士なども採用していたのは古代戸籍に家人の名が見えない理由は、家人が戸をなして別居するからだとする伝統的な説であった。これを否定すべく石母田氏が挙示された戸令第五条の規定の解釈に関するものがその一である。すなわち

○前
略。戸内有課口者。為課戸。無課口者。為不課戸。不課謂皇親及八位以上男年十六以下並蔭子耆癯疾篤疾〔寡〕妻女家人奴婢。

との条文について、「家人は戸内のもの、戸の成員として数へられてゐることは明かである。故に家人は律令制においては独立の戸をなして別居するといふ従来 of 解釈は誤りであるか、または少くとも不精確な表現であるといはなければならぬ。」(10)云々といわれる。この点に関する石母田氏の指摘は一見正しいようであるが、よく考えてみると腑に落ちないところがある。右の条文で皇親以下家人奴婢に至るまでは不課の例として挙げているのであるから、常識的にいえば、良民の戸内に家人、奴婢が含まれているのであって、家人、奴婢は独立した戸をなすのではないといつてよろしいようにも思われる。ところが、この条の集解朱説が既に注意しているように、課戸といい、不課戸といつても、その戸の成員の口数は特別に規定されてはいないわけであるから

以二一人以上一可レ為レ戸(11)

ということもできることを考え合わせると、戸内の全員が家人・奴婢であることをこの条文は決して拒否していない

といわなければならない。(朱説にひく「一人以上」の語が、今日の一人以上か、二人以上を指すかはしばらくおくが)現に、大宅朝臣賀是麻呂が東大寺に奴婢を貢進した文書の中には明らかに戸主が奴婢である独立した戸籍がいくつも現われている⁽¹²⁾。これらはそれ以前は良人であって、なんらかの理由で賀是麻呂の奴婢とせられたためにこのような戸主奴という形が生じたのだと解釈すべきではあるにしても、とにかく、その限りでは明らかに良民とは独立に編戸せられた(家人)奴婢の家族があったという事実は否定できない。また一人以上の戸という場合、これを文字通り今日の一人以上と解しうるとしたら、一人でも戸を成しうる法理上の根拠があったればこそ宝龜三年の「東大寺奴婢籍帳」⁽¹³⁾に「編首」に対し「単首」という語が使用され得たのではなかったろうか。しかしながら、勿論かくいったらばとて、一般的には家人、奴婢が良民の戸籍の中に含められ、その成員として数えられたということを否定するものではない。

(II) 次に、石母田氏は良民の戸籍の中に家人もまた奴婢の名称のもとに記載されていると考えられるとして大宝二年の筑前国嶋郡川辺里の戸籍の中でも有名な大領肥君猪手の戸籍⁽¹⁴⁾を検討された。この戸籍は総口数百二十四名に及び現存古代戸籍中最大なものであるが、三十七口にのぼる奴婢の部分は次のようである。

奴志麻 年貳拾陸歳

男奴意富麻呂 年貳歳

(1) 弟奴比多司 年拾陸歳

妹婢尾豆売 年貳拾玖歳

妹婢宿古太売 年拾肆歳

(2) 奴牧夫 年肆歳

(3) 婢大豊売 年陸拾参歳

婢小豊売 年陸拾壹歳

(4) 女婢久我泥売 年拾陸歳

奴許牟麻呂 年壹歳 久我泥売男、上件十口戸主奴婢

家人奴婢に関する一考察

(11)			(10)			(9)		(8)		(7)		(6)	(5)		
奴婢久爾壳	年拾伍歳		奴婢米豆良壳	年参歳		奴止利麻呂	年拾捌歳	奴婢嶋壳	年拾貳歳	奴婢手束壳	年肆歳	婢獲壳	女婢伊波豆壳	年捌歳	奴神哭
奴婢竺志壳	年拾陸歳		妹婢小椋壳	年拾歳		奴志許甫智	年貳拾伍歳	男奴度	年参歳	奴弓取	年伍拾貳歳	婢稻壳	女婢石壳	年捌歳	奴婢久曾壳
奴婢若津壳	年壹歳		弟奴真鳥	年拾伍歳		弟奴小鳥	年拾伍歳	女婢嶋壳	年拾貳歳	上件八口戸主母奴婢		婢獲壳	女婢伊波豆壳	年捌歳	奴婢久曾壳
奴婢久爾壳	年拾伍歳		婢倭壳	年貳拾歳		奴婢小嶋壳	年伍歳	女婢嶋壳	年拾貳歳			婢獲壳	女婢伊波豆壳	年捌歳	奴婢久曾壳

(12) 婢宇代売 年貳拾貳歳
女婢宿久波売 年參歳

(13) 婢惠弥売 年肆拾貳歳

(14) 奴伎麻呂 年伍拾貳歳 上件十八口戸主私奴婢

(15) 奴伊志牟良 年參拾壹歳

右の三十七口を八箇の奴婢グループと七口の個別奴婢とに分けたのは石母田氏であった。氏は八箇のグループが戸全体の同居集団の中において、日常生活上特別な地位を占めていたと推定し、とにかく「私業」⁽¹⁵⁾または「家業」⁽¹⁶⁾をもつ家人はかかる家族的結合をなすグループではないかとされた。戸籍に血縁関係を記載したすべての奴婢が家人であるというのではなく、又個別婢が家人たりえないというのでもないが、「ただ奴婢と記載された者の中に家人が存在するとすれば、それは恐らく家族的結合をなす奴婢グループの一部がそれに該当すると考へるに過ぎない。」と慎重な態度を示されながらも「唐においても部曲は奴婢と異なり家族的結合をなすことを一つの特質としてゐることを暗示してゐると思ふ。」⁽¹⁶⁾ともいわれる。以上の石母田氏の説は記載様式からする時は正にその通りであろうが、なお残された問題もある。

(1)―(4)のグループは戸主の管理下にある奴婢と考えられ、(8)―(14)のグループは戸主個人所有の奴婢であり、(5)―(7)のグループは戸主の母親所有の奴婢であり、(15)の個別奴婢は所屬不明である。これらの中で家族的形態をとっていると考えられるものが、たとえ掘って立て小屋であろうとも別屋に住んでいるとしたら、残りの個別奴婢は所屬の違いごとに別々に住んでいたと考えるべきか。あるいは個別奴婢は七口に過ぎないから一箇所に居住せしめられたとすべきか。またもし、別々に住んでいたとするならば、第一の戸主の管理下にあったと考えられるグループ中の(2)の僅か四才になったに過ぎない者の養育はだれがどこでしたのであろうか。その場合は当然(3)しか残っていないことになる。

また(1)グループの奴志麻二十六才の戸の中の妹婢尾豆売が二十九才であるというような矛盾もある。この場合、妹が姉の間違いとすることもできよう。しかしながら、前述の宝亀三年の「東大寺奴婢籍帳」によると、編せられたものは、その戸口に、編首より上の者は一名も記載されていない(すなわち編首の父母とか、兄とか姉とか兄よめとか

姉むことかいうものは一例も記されていない）ことから類推すると、姉婢尾豆売年二十九才と書いてあったのではないかとこの考えも疑問視される。

されば、年齢の点においてあるいは尾豆売拾玖歳を誤って式の字を加えたものか、志麻の年齢が参拾陸歳であるのを、式拾陸歳に誤ったと見るほうがよさそうであるけれども、これも無論確言できるものではない。

(3)の婢大豊売六十三才と(4)グループの筆頭者婢小豊売六十一才との間には姉妹の關係が存在しないであらうか。勿論、当時の人名が極めて簡単に同名異人も多かったといわれることからすれば、このようなことから姉妹關係を云々するのは疑問であらう。またもし、大豊売が小豊売の姉とすれば前述の「東大寺奴婢籍帳」の記載様式によるかぎりこの戸籍の記載とは異なった方式がとられねばならぬはずである。さればといって、この場合は東大寺のように明白に単首、編首をわけて記したものでないから、あるいは現実に大豊売には子供がなかったために、たとえ同一家屋内に居住していても、勢力がなく、妹の小豊売をもって編首として親子關係を示したものと考えることもできるのではあるまいか。また(Ⅱ)をすなおに見るならば（それが家人たると奴婢たるとを問わず）果してそれが家族形態をなしているものといえるであらうか。筆頭人が十八才でその弟は恐らく双生児であらう十五才の者二名、十才と三才の妹というのではまずそれは自然的な血縁關係を示したものに過ぎないといえよう。

そもそも戸令第四十条における有名な

凡家人所_レ生子孫。相承為_二家人_一。皆任本主驅使。唯不_レ得_三尽_レ頭驅使。及賣買_一。

との規定中の「不得尽頭驅使」とは義解によれば、仮にもし家人男女十人あれば二、三人は放して家業をとらしむることであると見え、集解釈説もほとんど等しく、古記では百人あれば六、七十人を驅使し、一家に二人あれば一人を役して一人を免じ、もし三人あれば二人を役し、一人を免じ、五人あれば三人を役して二人を免じ、老人は軽い労働をさせる、官戸驅使法については令にその条文なきも家人に準ずべし云々(17)と説明している。

肥君猪手の奴隸三十七口中個別奴婢七口を除けば、一応血縁關係を記したものの三十口となる。

そのうちわけ奴十一口、婢十九口であるが、ほとんど労働力として問題にならぬ緑兒緑女またはこれに近い類は奴三口、婢六口を数えることができる。而して(4)(Ⅱ)のごときは、労働の面から見ればきわめて不完全のものたるをま

ぬがれない。

家人は頭を尽して駆使するを得ずとする規定がこのような幼児をいれてのことであるならば、それは何も家人の特権とはいわれまい。事実上労働力となりえないものを除外して考えた場合、肥君猪手の戸に編せられている血縁関係を記したグループはいずれも、家族形態をなすとするには不完全過ぎると思われる。右の集解古記の説⁽¹⁸⁾によっても家人必ずしも家族形態をなしていたわけではないことがわかる。したがって(1)(4)(5)(7)(8)(10)(11)(12)などの中に家人がいたかどうか、その確率はさほど高くはないといえるのではあるまいか。

このように考えて来ると、戸を成すというのは主として戸籍上の問題であつたのではなからうか。前述の宝龜三年の「東大寺奴婢籍帳」にはこの点に關し、注目に値する記載が見られる。そこに載せられている東大寺所有の奴婢は官から奉納されたものもあり、諸国が買進したものもあり、また大宅賀是麻呂の貢進によるものもあり、種々雑多であつた。これらの奴婢を東大寺側では造籍に當り、それぞれにおいて一応二種類に分け

単首奴（または婢）何某

というものと

編首奴（または婢）何某

男奴何某

女婢何某

という様式とにしているのである。これによると、前者が戸（家）を成さざる単独、個別の奴婢、後者が戸（家）を成している奴婢（あるいは家人）であると考えられる。ところがこの奴婢籍帳の終りに

略○前 被僧綱去十月十七日牒備。造賤籍帳、具注腹次、限今年十二月卅日以進竟者、今依牒旨、件賤籍帳勘造、貢上如件略○後 (19)

とあり、それがいわゆる「家」「戸」を成しているか否かを示すためのものであつたというよりは「具注ニ腹次」せんがためのものであつたことを示している。即ちどのような血縁関係―生物学上の―にあつたかを示したにとどまるといってよいのではなからうか。生得身分である家人・奴婢において腹次を明らかにしておくことは実は所有主の権利

の確保につながるものであった。戸籍の記載はこの点から見らるべきものであろう。

戸令第四十二条⁽²⁰⁾の良賤通婚の結果生れた子は情を知らざれば離して良に従い、その他は賤に従わしむる規定は延暦八年五月十八日の太政官奏⁽²¹⁾によって破棄せられた。かくしてそれら所生の子は皆、良とせられることになったのであり、ここに賤民制度崩壊の第一歩が印せられたわけである。その理由は天下良民の後が悉く賤となり行くのを惜しんでのためとあるが、事実はもとよりそんなことではなく、賤民の名のもとに重課を遁れ、軽役につくことを謀る者が多く、国庫の収入の減少に悩まされた政府がその打開のためにとった措置であったといつてよい。

ところで、これによって漸次賤民の数は減少したはずであるが、この約八十年後、貞観五年九月二十五日付の太政官符⁽²²⁾によれば「今時においても、父母ともに奴婢である生益奴婢が万分の一の稀有の例としてなお存在している。ことに部内定額寺所有の寺奴婢として記載されているものもその実は存在しなかったり、逃亡したりしている者が多い。生益奴婢として記載されている者も実は生活に苦しむ公民の中に重課をのがれんがために寺奴婢に化けて名を棄て実を取っている者がなお存するやに考えられる。かくて歳入の減少を来しているから、これを取り締まるために生益奴婢の父母名をも記すべし」云々と見えている。この指令を遵奉した実例としては延喜五年十月一日付の「筑紫観世音寺資材帳」⁽²³⁾巻末の家人十三人についての記述がほとんど唯一のものであろう。ここに家人とあるも、それが寺奴婢を意味するものであることは記載を見れば明らかである。そうして十三人中、最年長者が八十才、最年少者が三十九才であることや、父母名の不合理な点（例えば、五十一才である嶋古女の母が五十九才の諸主女と記されているような）などから見ると寺家側で適宜にデッチあげた記載であるとの疑いを深くせざるをえない。前述したように、腹次を注することが、この意味でもまさに所有主の権利の確保につながるものであったことは間違いない。

二

家人と奴婢とが法律上常に並称されており両者がごく近いものと考えられていたことは言うまでもない。それどころではなく、家人と奴婢は混同せられていた。私は実質上は同じものであった、換言すれば家人というのは空に等しい法文の規定あるのみで事実上は存在しなかったといいたい。

戸籍において家人と奴婢とが混同せられていたことは既に述べた通りである。

次に家人の売買の場合について考えてみよう。この点については前掲の戸令第四十条に家人は本主の駈使にまかせらるべきも「唯不_レ得_二尽_一頭駈使。及売買_一。」とある。この売買するを得ざれとの禁止条目は果して遵守せられていたであろうか。例えば、集解戸令絶貫条の穴説⁽²⁴⁾に

仮令。常陸国_二家人奴婢_一。被_レ沽成_二京人奴婢_一。云々

とあるのや、同じ条の古記⁽²⁴⁾の

問。略_中未_レ知。家人奴婢以_二何処_一為_二本属_一。答。買_二得東国奴婢等_一。後放為_レ良。欲_レ還_二東国_一者聽。

とあるのは、家人奴婢ともに売買せられた証と見るべきであろう。家人奴婢の本属についての質問に対する答において奴婢「等」とあるのだから、それは家人奴婢の双方を指したものであること明らかであるからである。

かくのごとく事実上売買されている家人が法文上、奴婢と異なつて財物視されず、したがつてまた売買を禁ぜられていたということは何に基づくものであろうか。

この点に関して――家人は口分田の班給額においても、園宅地の班給を受けていないと思われる点においても、相続、処分の客体となりうる点などにおいても奴婢と何ら異なるところのない条件の下におかれていたのである。したがつて奴婢と異なつて売買せられぬという法律上の規定の根拠は家人のありかたと歴史的伝統によるものであろう⁽²⁵⁾――とする石母田氏の考えはもつともものように思われる。

しかしながら、これも形式的に家人を奴婢より一段上のものとして規定するために唐令にならつて設けた条文と單純に考えてもさしつかえないのではあるまいか。

前掲の戸令第四十条に該当する唐令の条文⁽²⁶⁾は、一応、

諸部曲所生子孫相承為部曲。

転易部曲事人聽量酬衣食之直。

の二つの部分を含んでいたことは中田薫、仁井田陞博士によつて復原せられているところである。これら日唐の条文を比較する時は日本令の前半部は唐令に基づいたものであることは言うまでもない。ところで後半部は唐令の完全な

姿がわからない以上断言することはできない。

ただ既に『唐律疏義』に「奴婢有価。部曲軋事無佑。」(卷二十五、詐偽)と見えているのであるから、日本で家人を売買できぬという点は、やはり唐令にも同じような条文があったか、なくとも、その精神を汲んでつくられたものと見てよからう。もとよりこのことは、日本の家人の歴史的 성격に基づくところがなかったということにはならない。

しかしながら私はやはり法文模倣の面を重視したのである。

頭を尽して駆使しえないとの規定が、唐令にあったものか、あるいは日本独自の規定であるかは明らかにはなしえない。ただ、立法者の理念では、家人はとにかく奴婢との間にある点では一線を画すべき存在としてとらえられていたということだけは確かであろう。ただし、それが、唐の部曲に相当する部分を充填すべき存在としての家人なる身分故、そうあらねばならないとしたものであるということをも妨げない。私はこの戸令第四十条の規定は形式的なものに過ぎなかったとの見方をとりたい。したがって法文の上において家人なる身分をつくつても實際上においては、奴婢そのものと変ったところはなかったと考えるのである。

例えば、もし家人が奴婢と事実上一線を画しうるときものであったなら、少くとも法律家によって「行事」として容認されていた売買の際、その価格に何らかの反映があつてしかるべきものと考えられるのに、実際にはそうした差は見出されない。売買されない規定のものが購入され得るとして、それは高価たりうるであろうか。逆に購入者側から言えば頭を尽して駆使しえない存在はその規定が事実上無規されるものであるとしても、それが農業奴隷たると家内奴隷たるとを問わず、値打ちの低いものと考えなければならぬまい。

現存している奴婢(その中には家人も含まれている可能性がある)売買の文書についてみても、特別、身分的な何ものかによって価格に差があったと推測できるような徴証は見当らない。奴隷の価格については既に滝川政次郎博士の実証的な研究⁽²⁷⁾があり、特につけ加えるべきものはその限りにおいて別にない。奴婢の価格を決定する要素は、博士によれば、用途、品質(年齢、体性、健康及び容姿、性情、技能)、附属物であった。

もしそれ、売買に当り家人が奴婢と異なるものとせられたとして、その目標とせられたものが何であつたかを問うとした場合、問題となりうる要素は(身分そのものを除けば)まず年齢と附属物ぐらいではなからうか。

年齢というのは官戸と公奴婢の關係から類推するのである。戸令第三十八条には官奴婢年六十才になったもの、廢疾者となるもの、また没官せられた者で戸をなす時以上三つの場合は官戸とせよ。さらに官戸年七十六才以上にならば解放して良民とせよ。但し反逆縁坐の官戸は八十才以上となった時、良とせよ。と見えているわけである。これは労働力として価値の低下せるものを解放の美名の下に生活の資を給与するの費をばぶくのが主眼であつたろうが、一面からいえば多年の労苦に酬いる意もなかったとはいへなからう。もっとも、官戸それ自体の十年間は事実上老年でじゅうぶんな労働ができないままに生活の資を官から与えられているとすれば、むしろ恵まれた期間といふべきかも知れない。

そこでもし、このような一般には官有奴隸に特有とされている年齢による解放が私有奴隸にも適用され、私奴婢のある一定年齢以上の高齢者が家人とせられたのではないかとの推察が成立するものとすればどうなるか。家人は一応広義の奴婢の中にありながら、狭義の奴婢と区別され、解放される一步前の状態あるいは資格を獲得したものと考えられよう。こう見た時、「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」⁽²⁸⁾に家人と奴婢が同じものとして記入されているいっぽう、大倭国の十市郡と山背国の宇遲郡に在る奴九口、婢十六口計二十五口の奴隸が放賤従良の訴訟をおこし、未だ判決の下っていない者を寺側で「蓋家人者」といつている事情が明らかにするのはなからうか。またもし、奴婢の年齢者が家人とされたのであるとすれば売買価格は当然安いものたらざるをえない。

捕亡令官私奴婢条の、官私奴婢逃亡して一年以上を経たものをとらえた場合はその価格の二十分の一を褒賞とし、一年以上を経過した者の場合は十分の一を賞とする。七十才以上及び癱疾で使役すべからざるごとき奴婢の場合その他ではおのおのその賞金を半減すべし、との規定⁽²⁹⁾が思い合わせられる。但しこの条の義解では、官私「奴婢」といつているのであるから、「即知家人者非也」と解している。しかしながら、これは家人は奴婢とは別の存在なりと頭からきめてかかった解釈であつたのではなからうか。あるいは想像が許されるならば既に中世的な家人^{ケニン}のあり方に多少の影響をうけた法律家が当然家人は奴婢とは異質のものたるべきを感じての解釈であつたともいえよう。

そうして現存している奴婢売買の文書には、このような高齢者は一応姿を見せておらないから、この点からのみする時は、価格の高低をもって家人と奴婢との關係を云々するのは当をえておらないことになる。しかしながら家人と

奴婢は本来同じものであり、ただ何らかの点で法文上で中国の賤民の階等に見合うものが要求せられた結果できたに過ぎないものとする立場からすれば、右の点はさして問題とするには当たらないと思う。

次に附屬物というのは着衣と口分田と個人有財産の三つを指すであろう。この中で着衣は問題となるまい。口分田は家人奴婢は良人の三分の一を給与せられる規定であった。ところで今日残存している奴隸売買の文書における価格は果してこれを含んでいたのであるか。また奴婢売買にはこの口分田はそのまま買主に引渡されることになっていたのであろうかどうかと言いかえてもよろしい。この点口分田の引きわたしは従来自明のことながらのように扱われて来たけれども、私は疑問に思う。動産ならば知らず、不動産を附屬物として買主が取得するというようなことは距離的に見て不可能な場合が多かつたろうと考えられる。例えば前にも述べた戸令集解絶貫条穴説の例挙げた常陸国の家人奴婢が京の人のもとに売りわたされる場合など常陸国においてどの程度班田が実施せられたかは別として、まず本人の身柄が京に移された時、口分田が家人奴婢について買主の所有に移り、買主が何人かに賃租せしめるか、あるいはこれを実際上は他に私売するというように取り計らったと考えるべきであろうか。それともこの私奴婢の口分田（不税田であるから一般の口分田とは性格を異にしている）は一旦収公され、新主人のもとに移動した後、その新しい附貫地で口分田を改めて班給をうけたのであろうか。勿論、奴隸の居住地が買主の近くであるならば問題はないであろうし、またある程度の距離のところで、掘って立て小屋であるにせよ、住居を構えていたと考えられる奴隸はそのまま所有権のみが移転したであろう。

天平十九年の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」に見える大倭国十市郡、山背国宇遲郡にある家人奴婢のごときはこの類であろう。しかるにこれらの家人奴婢の口分田については、例えば藺地についてではあるが、

河内国陸町式段（淡川郡六町（30）和泉郡二段）

というように、二段の土地までのがさず記入し、大きな面積の土地の端数何歩までをとらえる、寺の資財帳に、十市郡の分もなければ宇遲郡の分も少しも姿を見せておらないのは注意を要する。しかればそれは全部他からの購入、施入によらず、元来の寺奴婢であったが故に、口分田の班給がなく、したがって土地の記入も当然のこととしてなかったとすべきであるか。あるいは、田令官戸奴婢条（31）の義解、集解の釈説、古記等が語るように、寺家人、奴婢には口

分田は給さない規定であるから、從來私人の（家人）奴婢であったものが、寺に入れられた時に、その從來の口分田は収公されることになるが故に、十市郡、宇遲郡に何ら寺田、寺地のないのは当然であると解すべきであろうか。資財帳に奴婢を記入すれば、たとえ彼らに口分田がついていたとしても、いないとしても、それらは奴婢という言葉の中に含まれるものとして土地は別に書きあらわさないというような規定があったとはまず考えられない。いずれにせよ寺奴婢に対する寺の管理の何とルーズであることか。私はこの場合は恐らく当初からの寺奴婢ばかりではないと考える。さればこそ、放賤従良の訴えも出るし、かくのごときルーズな把握しかできなかったのであろう。また、他からの購入、施入のごときものがあつたとすれば、その際、口分田は別物として取り扱われたものとする。また、他から。また後述の東大寺の場合から類推するに、彼らは農業奴隸ではなかったものと思われる。

天平勝宝元年及び二年に太政官符の旨に基づいて東大寺に貢進された美濃・近江・丹後・但馬諸国からの奴婢の中で但馬国からの奴、池麻呂、糟麻呂（ともに二十四才）藤麻呂（十五才）の三人が天平勝宝二年、貢進の年以降しづば逃走を企てたことがあつた⁽³²⁾。この場合、それらの各国の貢進の奴婢には從來の考えでいくならば口分田が伴なつていたはずであつた。寺奴婢には口分田を給しないという規定⁽³³⁾によつてこれらの奴婢に從來支給せられていた口分田は収公せられたかあるいは収公せられる予定となつたのであろうか。これらの貢進関係の文書にはその土地に関する何らの記載もない。勿論、問題は人間そのものにあるのであるから、土地のことが文書に記載されておらないからとて直ちに口分田が奴婢について移動していかないことにはなるまいが、どうも口分田は別物であつたのではないかと考えられる。十二世紀前半に完成したと思われる『東大寺要録』雜事章第十の「東大寺職掌寺奴事」⁽³⁴⁾に

略○前 寺家請納^二史幹之人^一。預^二供仏施僧之事^一。為^二上司職掌^一。以^二良匠之器^一。為^二造寺之工^一。又伝^二歌舞音楽之曲^一。備^二供仏大会之儀式^一。其子々孫々。相繼為^二寺奴婢職掌^一。于^レ今勤^二三仕寺役^一。供^二奉諸会^一也。朝^二払霜雪^一。備^二大仏供^一。廻^二毎日不闕之計^一。暮^二戴三星辰^一。侍^二宝蔵辺^一。防^二盜賊火難之畏^一。寺家要人只在^レ此耳。奴婢等籍帳廿二卷。在^二印蔵^一。^(傍点)
^(筆者)

と見えており、この編纂者の「私云」との文言の前には天平勝宝二年正月八日付の但馬国司解の文が引用されている。右の引用文中傍点の部分は恐らく「寺家人要只在^レ此耳」とあるべきところと思われる。されば(イ)奴婢も家人もこの場

合同じと考えられていたこと、(ロ)このような奴隷の用途からすると、農業奴隷として寺側は受け取ったものでなく、したがって口分田ということは問題となっていなかったことの二点は明らかであると考ええる。

元來、口分田は相博・相替⁽³⁵⁾が許されるだけで、売買は禁ぜられていたものであることはいうまでもない。したがって表向き、口分田を売買した文書は残っていない。しかし、奈良時代の用語例では、「売」⁽³⁶⁾は、賃租即ち今日の一年小作に出す場合にも用いているのであるから、簡単にいうことはできない。

とまれ、現存の奴婢売買の文書そのものからは、その口分田も、価格の中に含まれているか否かを知ることには残念ながらできない。

實際上においては、賊盜律、略奴婢条⁽³⁷⁾に見えるような逃亡奴婢をとらえながら、五日以内に官に届け出るべき規則を無視し、したがってまた正式の売券も作製せずに、この奴婢を他に「私売」する行爲が、かなり横行していたのではなからうか。

次に個人有財産についていえば、右の賊盜律、略奴婢条に

凡略^ニ奴婢^一者。以^ニ強盜^一論。和誘者。以^ニ竊盜^一論。各罪止^ニ中流^一。即奴婢別賣^ニ財物^一者。自從^ニ強竊法^一。不^レ得^ニ累

而科^一。若得^ニ逃亡奴婢^一。不^レ送^レ官而売者。以^ニ和誘^一論。^{略○後}
 と見える。ここにいる、奴婢が別に財物を所有するというのは、疏文に「奴婢身所^レ着衣服外。乘有^ニ財物^一」と説明している。

僧尼令第一条の集解穴説⁽³⁸⁾に

略○前 又略^一及^一和^一誘奴婢^一。并盜^ニ家人奴婢之財物^一者。同^ニ此条罪^一。^{略○後}

と見え、また戸令、応分条⁽³⁹⁾の義解には、僧尼が嫁娶して子を生み、私財を畜え、身死したる後の遺産相続はいかに扱うべきか、に続いて家人奴婢の場合に説き及び

略○前 其家人奴婢身死。有^ニ財物^一其子孫應^レ分者。亦准^ニ此法^一。^{略○後}

としている。これらの示すところによれば、即ち奴婢は明らかに、衣服以外の私有財産をもっていたといえる。それは恐らく、布帛の類や装身具、若干の穀類などであったろう。それが西欧古典古代の奴隷の所有せる peculium⁽⁴⁰⁾の

ように動産及び不動産を含むが、奴隸が死ねば主人の手に帰すべきもの、奴隸が自由に処分できないものというような性質をもっていたかどうかはつきりしたところはわからない。またそれが「若干の家畜と一片の土地」であったかどうかともわからない。

いずれにせよ、奴婢の身柄が移され、移住せしめられるとなれば、それらは身につけうるものは別として、一般に処分せられたであらう。

家人とはこのような個人有財産をある程度ためて、以て自由の身に一步近づいた奴婢を指していたのかも知れぬのである。

以上、売買の面からみても、家人と奴婢とをわかつべき何物も特に発見されなかったといつてよい。

家人と奴婢が混同されていたあるいは事実上同一物であったことの証拠はほかにも存する。例えば『類聚三代格』の卷三の「家人事」の項には、勅一、太政官符一を収載しているのであるが、その内容は薬師寺の奴婢及び生益奴婢に關するものである。『類聚三代格』の編者にとつても家人と奴婢は同じものであったということは注意すべきである。

石母田氏は右の事実と、既述の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」の記載とを合わせ考えて、家人と奴婢は「律令における煩瑣な区別を問はなければ、両者を同一のもの」と考え、そう扱うほうが「察ろ当然であり、戸籍において両者を区別する方が却つて無意味であった」ともされた。私もその通りであろうとは思ふけれども、いっぽう同氏のように「律令における煩瑣な区別」が何らかの現実を反映し、意味をもつものとは考えないのである。それは数多くの律令中の家人、奴婢に関する規定をみても、両者全く同一の扱いであるか、稀に別あるごとくであっても、實は中國における部曲と奴婢の違いを示す箇条に当るところで部曲の語を家人に替えたまでに過ぎないからである。要するに、大化前代の部民に部曲の名称をあててしまっていたわが國で、律令において唐制にはずれぬようにするため、もて来った語が家人であったまでで、実体はほとんどなかったものと見てさしつかえないと思う。家人をケニンとよむか、ヤケヒトとよむかの点について考えてみても、このことは明らかであらう。宮崎道三郎博士は家人という漢語が本でヤケヒトという國語が起ったとされ、川上多助氏は逆にヤケヒトという國語が本で家人という漢語が用いられたとされる。坂本太郎博士は、「この語の始源を外来語の採用、しかもそれは知識社会に於て漢字面を通しての採用と考へ

る趣意から躊躇なく」宮崎説を取られる。そうして「ヤケヒトがヤッコと同じやうな根源的自生の言葉であらうか。語感の上から見てヤケヒトには到底ヤッコに於けるやうな自然の力が認められないと思ふのは私の僻見であらうか。」「(川上説にいうごとく) 古来慣用の国語に充てた家人ならば後世もっと世に行はるべきでなかったかが反問されるのである。私は家人の語の採用に本づいて之を国語風に強いて読まんとしたもののがヤケヒトであり、ヤッコの自生的な古さと強さとは到底匹敵し難い言葉であると考へる。」(43) ○(内) 筆者補ともいわれる。私は坂本説に全面的に賛成である。したがって、ここでは家人はヤケヒトとよむべく、ケニンのよみ方は、中世武家社会における従者の場合に適用するほうがよろしいと思う。

そもそも賤民に対する考え方が、わが国の場合割合に甘かったのではないか。

天平勝宝二年二月二十六日、政府より東大寺に施入された官奴婢及び嶋宮奴婢計二百人中、嶋宮奴の奴長伊万呂(当時四十八才)は勅によって同日(正式には三月三日付)奴を免じて良とされたばかりでなく、佐伯の姓を賜わり五十戸政に任ぜられている(44)。同日、孝謙天皇は、これらの奴婢は六十六才以上または癡疾者は官奴婢に準じこれを官戸となし、政府の扱いとなすべく、高年に達せずとも、「立性恪勤、驅使無違、衆僧矜情、欲_レ從_レ良者、依_レ願令_レ免」と命ずるところあり、凡そ寺に施入せる奴婢については指一本指すべきでないけれども、この場合は悪く取り計らうのでないから、還し賜うべきは還し給うも障りはあるまじ、今、差しかえに施入する奴婢についても同じ、との宣命(45)を下されている。この伊万呂とともに鮑女ら三名はその天平勝宝二年五月十日(鮑女三十九才)美濃国から交易進上された奴二名婢一名と交代にもとの小治田禪院に居住せしめられ(46)、更に、天平勝宝七年十月二十五日恩勅によつて放賤せしめられた(時に鮑女、四十四才)。この時鮑女は左京三条一坊戸主大初位下阿刀宿弥田主の戸口となつて阿刀姓を名乗っている(47)。それから十六年以上たった時、即ち阿刀鮑女が六十才以上になった宝龜二年以降の某時の文書(48)によれば、彼女には従八位上の位階が傍書されるに至っている。

右にのべた伊万呂や鮑女はいずれも特例中の特例であるかもしれない。しかしながらこれらのかつての奴婢はとにかく五十戸政となつたり、従八位上に叙せられたりしていることもまた事実である。官戸、官奴婢あるいは家人、私

奴婢から脱却した「今良」⁽⁴⁹⁾なる語は社会的には多少、奴婢に近い感をもっていたようであるが、法律的にはローマ時代のように「被解放奴隷」⁽⁵⁰⁾なる一身分を形成することはなかったわけである。

ま と め

以上、戸籍上の記載、律令における家人奴婢の同様な扱い、事実上における家人と奴婢の同一性、家人に関する法の規定の空虚さ、家人の国語的な始源等からみて、「家人」なる身分は実質的には存在しなかったと考えたい。法文上に「家人」を設けたのは、中国の賤民規定に合わせ、その部曲に当たるところに部曲の語は大化前代に既にこれを採用していたため、中国における私家の賤民を意味するこの家人の語をとって、ここに充当したまでである。その場合家人と奴婢とをわかつ点は法文上では、頭を尽して駆使せられぬことと売買せられぬことにあつたが、事実上は大した意味をもたなかった。強いて、家人なるものが、奴婢そのものの中で、区分されていたとすれば、恐らく老齢者であるか、または個人有財産を以てこの地位を購ったものと考えられる。

註

- (1) 阿部弘藏『日本奴隸史』
- (2) 宮崎道三郎「家人の沿革」(中田薫編『宮崎先生法制史論集』所収)
- (3) 三浦周行「古代賤民制」(『史学雑誌』九ノ九)「御家人の特質」(『経済論叢』二〇ノ三・四・五)等
- (4) 川上多助「古代賤民制に就いての一考察」(『日本古代社会史の研究』所収)
- (5) 滝川政次郎『日本奴隸経済史』『日本社会史』等
- (6) 石母田正「古代における奴隸の一考察」上・下(『経済史研究』二八ノ五・六)
- (7) 『史学雑誌』五八ノ二
- (8) 前掲『日本社会史』(新訂普及版)一一七頁
- (9) 『内遠全集』(『増補本居宣長全集』所収)六六四頁
- (10) 石母田前掲論文(上)四頁
- (11) 国史大系本『令集解』(前篇)二六三頁
- (12) 但し、独立した戸籍といっても、本来の戸籍の型式ではない。左に一例を示そう。

山背国司移 大養徳国司

合奴婢貳拾捌人

略○中

奴牛廿年卅八

奴真廿年十六

奴千吉年廿四

奴真吉年廿

婢真枝足女年廿

奴安麻呂年五十七

婢奈為女年廿

婢香留女年十七

奴小君年卅三

右九人、紀伊郡邑薩里戸主輕部牛甘戸口所貫

略○後

『寧楽遺文』下、七四一—二頁

右の牛甘はいわゆる「戸主奴」と称せられるもので、この種の人物に摂津国島上郡野身郷の輕部造弓張（『寧楽遺文』下、七四三頁）などもある。ところでこの場合の「戸主奴」は「戸主である奴」の意であるが、現存、計帳に散見する「戸主の（所有に属する）奴」の意味での「戸主奴」も別に存する故混同せぬよう一言断っておく。『寧楽遺文』上、一四三頁、戸主奴古麻呂年参拾参 右鼻疵 同上、一四七頁 上件玖口戸主奴婢、同上、一五〇頁 上件十三口戸主奴婢、同上、一五二頁 上件四口戸主奴婢 等

(13) (表題) 東大寺奴婢籍帳一卷 宝龜三年歲次壬子案

略○中

編首奴大井

年卅九
左手小指疵

正奴

女婢浜刀自女

年廿八
左鼻福良黒子

正婢

男奴吉繼

年一

黄奴

編首奴魚主

年廿七
右手球黒子

正奴

弟奴魚公

年廿二
食指
右手球黒子

正奴

弟奴魚成

年十一
左頬黒子

小奴

妹婢繼女

年六

小婢

「死」單首奴広津

年卅九
左高頬黒子

正奴

單首奴真立

年廿七
鼻於疵

正奴

編首婢蓑女

年卅
左手球於黒子

正婢

男奴田人

年十五
右目下大黒子

小奴

男奴田主

年十三

小奴

男奴田長

年六

小奴

女婢真蓑女

年廿二
右目本黒子

正婢

女婢笠刀自女

年四

黄婢

弟婢乙蓑女

年卅二
右手球黒子

正婢

略○後 『寧楽遺文』下、七七三—七八一頁

(14) 『寧楽遺文』上、九五頁以下、この件りは九八—九頁

(15) 国史大系本『令集解』（前篇）三三八頁

(16) 石母田前掲論文（上）一五頁

(17)、(18)、註(15)に同じ

(19) 註(13)に同じ

- (20) 国史大系本『令集解』(前篇) 三三九頁
 (21) 国史大系本『類聚三代格』(後篇) 五二二頁
 (22) 国史大系本『類聚三代格』(前篇) 一四二頁
 (23) 『平安遺文』(第一卷) 二四八—二八六頁 特に次の件
 略○前
 りは二八五頁

家人者拾参人

大男肆人

大女玖人

諸主女 年五十九
丁女

右一人、父奴得侶麿、母婢諸刀自女等所生

福次丸 年七十二
老丁

子猴麿 年七十二
老丁

友主女 年六十九
次丁

右三人、父奴浜長、母婢子虫女等所生

望成女 年七十七
老女

小望女 年八十
老女

右二人、父奴磯長、母婢魚成女等所生

友吉女 年七十一
老女

福富女 年七十一
老女

今成麿 年卅九
正丁

全吉麿 年六十一
正丁

望主女 年卅九
正丁(ママ)

嶋古女 年五十一
丁女

父奴豊主
母婢友次女
父奴吉次
母婢福次女
父奴小望丸
母婢小望丸
父奴浜長
母婢子虫女
父奴福次丸
母婢望成女
父奴吉次丸
母婢諸主女

家人奴婢に関する一考察

吉子女 年卅七
丁女
父奴得侶丸
母婢諸刀自女

- (24) 国史大系本『令集解』(前篇) 二八一頁
 (25) 石母田前掲論文(上) 一九—二〇頁、但し、ここでは全体の意をそこねぬ程度に少々文章を変えておいた。それは二〇頁のところに「家人のみが売買の対象にならないといふ事実は」という誤解される表現があるからである。
 (26) 中田薫「唐令と日本令との比較研究」(『法制史論集』(第一卷) 所収) 六六四頁、仁井田陞『唐令拾遺』二六二頁
 (27) 滝川政次郎『日本奴隸經濟史』特にその第三編「奴隸の価格」
 (28) 『寧楽遺文』中、三四四—三六五頁、特にこの件りは三六一頁
 (29) 国史大系本『令義解』三〇五頁
 (30) 同右三六二頁
 (31) 国史大系本『令集解』(前篇) 三六八—九頁
 但し、古記には「問。家人奴婢並給三分之一。未知。寺家々人奴婢如何処分。答。无給之法。但從來有田寺者。不_レ在給限。唯无_レ田寺臨時量給耳。」と見え、寺家人、奴婢にも全く班給しないというわけではなかった。
 (32) 『寧楽遺文』下、七五一頁、七五九頁、七六〇頁、七六一頁、七六四頁、七六五頁
 (33) 註(31)に同じ
 (34) 筒井英俊校訂、全国書房刊行本、二六一頁
 (35) 国史大系本『令集解』(前篇) 三六七頁、田令、交錯条

- (36) 国史大系本『令集解』（前篇）三六七頁、田令官人百姓条
古記などもその一例
- (37) 国史大系本『律』七五頁
- (38) 国史大系本『令集解』（前篇）二一〇頁
- (39) 国史大系本『令義解』九九頁
- (40) クーランジュ著『古代フランス土地制度論』（上）四七頁参照
明比達朗訳『古代フランス土地制度論』（上）四七頁参照
- (41) 石母田前掲論文（上）八頁
- (42) 例えば賊盜律謀反条、略人条などを見よ。
- (43) 坂本太郎「家人の系譜」『史学雑誌』五八ノ二、二二頁
註14
- (44) 『寧楽遺文』下、七五五頁、七七二頁、参照
- (45) 同 右、下、七五五頁
- (46) 同 右、下、七六一頁
- (47) 同 右、下、七七〇頁、東大寺三綱牒、ここでは鮑女四
十五歳とあるが、実は勝宝八年八月二十二日のこの文書
の作製年によって一歳上に誤ったものであろう。
- (48) 同 右 下、七七二頁
- (49) 滝川政次郎「今良考」『史学雑誌』四二ノ一 参照
- (50) クーランジュ前掲訳書（下）第十章・十一章参照